2　済生学舎出身の生化学者旧制金沢医科大学学長「須藤憲三」について

唐沢信安

㈠　はじめに

済生学舎出身の生化学者で、東京帝国大学医科大学で研究し、糖の定量法や、脂肪の定量法を開発した須藤憲三について述べたい。

須藤はドイツ留学後、旧制の金沢医学専門学校の教授から学長になり、今日の金沢大学医学部の発展に大きく貢献した人物である。

㈡　須藤憲三の生い立ち

須藤は、明治五年一月十日、山形県東置賜郡赤湯温泉の町人宿「あぶらや」の長男として生れた。父は須藤富右ヱ門と称し、商人であったが漢学及び書家として赤湯では名士であった。母方の出身は、上杉藩の藩医の家系であった。

憲三の幼名を健蔵と云い、赤湯小学校時代より聰明な少年であった。十五歳の時、憲三は母方の伯父、佐藤精一郎を頼って上京した。当時伯父の精一郎は松本良順に師事し、良順の後援を受けて、神田錦町三丁目に「東京医学院」なる私立医学校を経営していた。

最盛時には、生徒が二百名にも達したといわれる。上京した憲三は、東京医学院の宿舎に寄宿して、伯父の精一郎から学資の援助を得て勉学を始めた。それは明治十九年の事であった。

ところが、伯父の精一郎は時の文部大臣森有礼と教育上の意見の衝突を生じた事も重なり、最終的には学校経営に失敗して破産してしまった。

勉学の道を失った憲三は、長谷川泰の経営する「済生学舎」に転校し、医術開業試験に備え学習を続けた。憲三は独学に近い勉強と努力を重ね、明治二十六年四月に、内務省医術開業試験に及第し、医師の免許を得た。

憲三は同年九月、東京帝国大学医科大学の生理学教室の選科生となり、二十七年四月迄在籍して医学を修業した。

㈢ 隈川宗雄教授と須藤憲三

ここで憲三の師となる隈川宗雄との関係を述べておきたい。

隈川宗雄は安政五年十月十三日に福島県福島町の藩医原有鄰の次男として生を享けた。蘭学者隈川宗悦の養子となり、明治十五年に東京大学医学部を卒業し、養父の命により、ベルリン大学に学び、明治二十二年に帰国した。帰国後、生理学の大沢謙二教授の下で、化学に関する講義を開始した。明治三十年三月、我が国初の医化学教室が、生理学教室より独立分離され、隈川宗雄が主任教授に任ぜられた。

その時、隈川は部下須藤と共に、動物体における脂質代謝を詳細に研究し、脂肪から糖は生成しないという結論に達した。この分析法は「Pavy—隈川—須藤の糖及び脂肪の定量法」として夙(つと)に知られている。須藤は明治三十五年に「医化学実習」という後世に残る大著を出版している。

㈣ 済生学舎、日本医学校の講師須藤憲三

この多忙な生活の中で、須藤は母校の済生学舎で明治三十四年から生理学、医化学を講義している。更に済生学舎廃校後の同窓医学講習会では生理学・内科学を教授し、日本医学校が創立されるや生理学を毎週講義した。

㈤ 金沢医科大学長としての須藤憲三

須藤は待望のドイツ留学を明治四十五年一月に命ぜられ、ベルリン大学及び、ウィルヘルム研究所で学問の道を深めた。留学中の大正元年十二月に金沢医学専門学校教授に任ぜられ、大正三年に帰国し、済生学舎出身の土肥章司皮膚科教授と共に、正式に金沢医学専門学校に着任した。須藤は医化学教室を創設し、「質実剛健」の学風を起すべく努力した。また大学に昇格する為の諸設備の充実を図った。その結果大正十二年に大学に昇格し、大正十三年より、高安右人前学長の後任として須藤は二代目学長に選任された。

その後、種々の活躍を行い、全国の医学生の学習用として「小医化学実習」を出版した。須藤は昭和九年一月七日、脳溢血で静養中、狭心症の発作を併発し、不帰の客となった。享年六十一歳であった。

（日本医科大学）